

「マチでくギャラリー」 #6
2014年7月8月の展示
大隅秀雄・中川久
花巻市東和町土沢商店街 22 号所
発行 東和町土沢商店会連絡会 2015年5月
企画・編集 toncacci atelier
花巻市東和町田瀬 14-120
代表 菅沼緑
roqu@me.com
<http://www.arttsuchizawa.com/>
<http://machikado.urdr.weblife.me/>

toncacci atelier

2014年7月～8月の展示

大隅秀雄 中川久

#6



日常の風景



まちでくギャラリー

マチてく ギャラリー



展示の場所

花巻市東和町土沢商店街



展示にご協力いただいている各商店や個人の方々に支えられて「マチてくギャラリー」が成り立っています。
いつもありがとうございます。

歩いて行くことにした。僕は母親が朝早く電石から歩いて墓参りしていた姿を思い浮かべ歩いている
といつの間にか坂道に差し掛かっていた。と、一台の車が僕のそばで止まつた。「新里さん」と女性
の声がした。「えっ」と僕は声を発し車のそばに近づいた。車の中の女性は「ツカさんの息子さんで
すよね」と続けて僕に声を掛けてくれた。女性は母親がいる介護施設に以前勤めていたということで
ある。僕は女性の車に便乗し、墓まで送つてもらうことにした。墓場には雪が多く、風雪も激しい。
花と水だけにして、僕は墓の前で手を合わせた。家までの帰りは、タクシーである。この日は、2度
僕の心が熱くなつたことを思いながら無事家に着いたのだった。とても幸福感でいっぱいな一日とし
てこれからも記憶に残るだろう。

暖かくなつたら、今度は自転車で春木場に行くことにしよう。

母親にあつてから家に戻り、洗濯を済ませテレビの野球中継を気にしながらこの文章書いている。
午後7時半になるところだ。これから晩飯の準備をしよう。未だ暖房を利かしている居間の座布団に
座り、「スタンダード・バイミー」の曲を口ずさみながらカレンダーの今日の日付を確認し、こよなく愛
飲している缶ビール蓋をプッシュと開けたところ…。

つづく（4月21日）

位角度を変えて見えたからである。遠近法的な発想から見ても、近くの木々もそれなりに右側に揺れた。風のせいかしら、確かに風が強くなっている。いや僕の心が揺れたのだ。酔つてきたのだろう。落ち着いて、深く呼吸を瞑想的な安堵が広がることを待つしかない。僕は一口ビールを飲み込んだ。10センチの心の揺れは、消えていた。思うことは、決して思考ではない。僕はただ真実、虚実ではなく事実でさえあればいいのだ。

3月23日月曜日、彼岸の中日である。春と秋のそのどちらにも係りなく、僕は彼岸には中日に行くことに決めている。前日、そのために花だけは用意していた。線香と水と布をリュックに詰め、僕は家のドアを開けた。物凄い風が中に入ってきた。雪も斜めに吹き飛んでいる。最悪の天候だ。だが僕は逆に嬉しくなり外に出たのである。雲石駅まで歩いた。人通りはほとんどない。駅に着くと、数人の人たちが不安げな顔をしていた。缶ビールを1本買った。午後2時53分大曲行きの電車に乗った。車両の中はガラガラである。3分ほどで春木場駅に着き、急いでビールを飲み干しホームに降りた。すると、一人の青年がカメラを構え撮影しているのである。同じ列車に乗っていたのだろう。たぶん駒ヶ岳を写していたのかもしれない。その青年は、列車が走る前に辛くも飛び乗ることができた。走る列車の中を見ると、青年がいた。ビクは彼に手を振った。すると、青年も手を振り返してくれた。僕の心は、とても熱くなっていた。列車は、秋田方面へと静寂を残し消え去った。ホームには、僕一人だけがいる。僕はしばらくホームにじっとしていた。風も雪も先程より激しくなってきた。ここが春木場なのだ。空を見上げると所々に青空も見え、駒ヶ岳、岩手山も見えている。時々しか来れない春木場周辺の景色は、当たり前のことではあるのだが、少年時代の頃と全く変わっているのは不思議なことではない。しかし何故かホームに立っている僕の心境は、昔どちつとも変わっていない気持の方々が不思議である。やはり僕は春木場駅が本当に好きなのだ。記憶に残る駅は多くあつても、好きな駅はそんなにないのだ。再び、僕は静寂に酔つた。僕は母親が墓参りする時にいつも通る裏道を

第6回目の「マチでくギャラリー」です。この回は大隅秀雄さんと中川久さんのお二人にお願いをしました。

大隅さんは東京芸術大学の工芸科を出て、ずっと金属を素材にした彫刻を作っています。その彫刻が風にゆらゆらとそよぐのです。

その作品からは、大隅さんが金属の特性を熟知した上で、いろいろな金属を適材適所に配置し、さらに加工も細心の注意を払いながら制作をされていることが容易に見て取れます。だからこそ可能になる、素材に意思を遷す作品になっているのだと思います。

もうひとりの作者は中川久さん。こちらは、平面作品です。そして平面であるからこそ生じるさまざまな問題を自分の眼と、考えで確認をしながら前に進む作業をずっと続けている人です。

絵というものが、何かしらの形と色を塗ることで「平面」にイメージをもたらしてきた歴史があります。その歴史の中で、物事の事実を、絵画として検証する歴史の積み重ねを、作業として絵画を作り続けているのだと思います。そういう「事実への探査」を通して、新しい具象絵画のあり方が見えてくるのかも知れません。

大隅秀雄

おおすみひでお

1955年 宮城県生まれの大隅さんは、一貫して金属を自分の手で加工して、風に揺れる作品を生み出し続けています。

「マチでくギャラリー」に展示する写真は観〇光 ART EXPO 2013（京都／鎌倉）の時の展示の様子を撮影したものです。

古いお寺の境内に現代的な造形の金属彫刻がゆらゆらと風にそよぐように佇む様子は想像するだけでも豊かな気持ちにさせられると思います。

これらの作品はチタン合金で作られており、非常に軽く強い素材として、航空機などに使われる加工の大変に難しいものです。

大隅さんはそれを自由自在に使いこなし、色までも、チタンそのものが発色するよう、加工されたもので、雨風に遭つても決して変わることのない丈夫なものになっています。

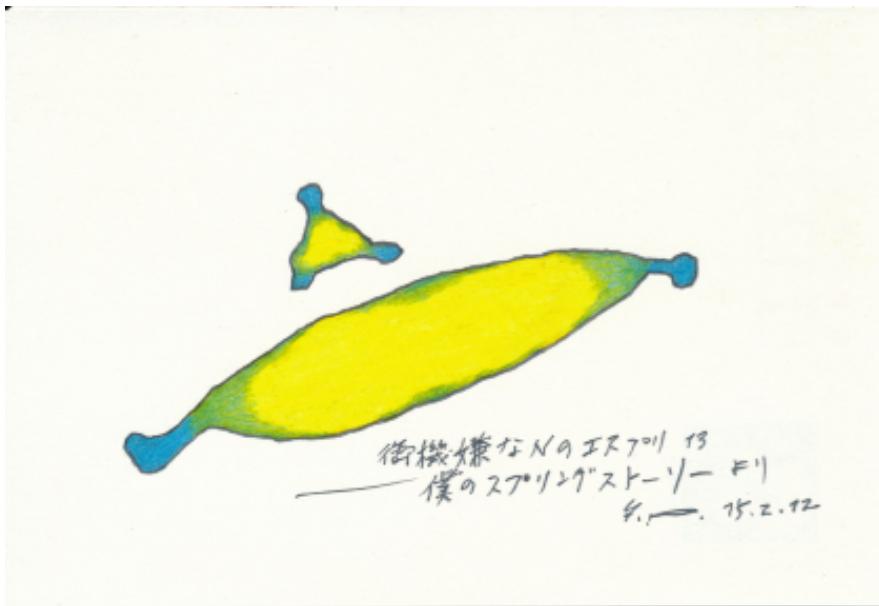
それらの加工をすべて自らの手でこなし、素材の持つ特性を十分に理解してなされたものです。

古い寺院の佇まいと新しい造形のゆるやかで風にそよぐ大隅さんのおおらかな感性とのコントラストがここでは見事に溶け合い新しい風景を作り出していると思いました。

近頃、僕は昔のことを思うことが多くなっているような気がする。

その日もそうであった。今年（15年）3月29日曜日、まだ肌寒い春石アルペン広場のベンチに一人座り、缶ビールを飲みながら川の流れる澄んだ音、いや力強く走る列車の音を聞いていた。橋の方ではなく、駅周辺の景色がはつきりと蘇ってくる。春木場駅である。春木場という地名は山から切り出した木材を町へと運んでいたことから呼ばれたのだという。今は、旧国鉄からJRになっているのだが、僕の少年時代には橋場線であった。もちろん秋田方面には通じていなかった。秋田方面に行くには山越えしかなかつたに違いない。僕はそのことを知らない。ところで春木場駅は、盛岡駅からの下りで大釜、小岩井駅と続き春石駅の次の駅である。そして次の廢駅となつた橋場駅までだと記憶している。手元に詳しい資料もなく、聞こうとする人たちは年を取つたりしくなつたりしている。僕は空を見上げ、ビールを一口飲んだ。目頭に雨が、いや鳥のやさしい囁りが降つてきた。再び思い出す少年時代の春木場の田園風景、僕にも無垢な時の流れがあつたのだ。今、その路線は田沢湖線になっている。僕の小学生の頃だったか中学生の時だったかの記憶は定かではないのだが、心境が一変したことは覚えている。無人駅であることは未だに変わらない。その当時、少年であつた僕が一変したことが良いのか悪いのかを判断できる知恵もなくただ納得するしかなかつた。たぶんよかつたのだろう。山にはトンネルは開けられ、秋田方面にも短時間で行ける便利さが与えられたのだから…。その後、僕は高校2年の時に今住んでいる春石の家に両親と3人で引っ越したのである。これから盛岡の高校に通い、そして東京の大学、初めてのアトリエがあつた神奈川へと移動した。その間、2度の結婚、2人の息子を授かって幸福という文字を知り2001年11月に春石に戻つて来たのだ。それから父親が死に、母親は氣取らずに生きている。もう15年になるのだ。考えてみたこともなかつたことだが、20世紀に跨がれたことは何も僕だけの奇跡ではない。みんなの御陰、万物の御陰と感謝する次第です。

飲んでいた缶ビールが、空になつた。もう1缶ビールを入手しベンチに戻つた。先程座つていた位置より10センチ位左側にずれて座つたようである。トンネルのある山、秋田駒ヶ岳が右側に10センチ



しづくいし奇譚

—切抜帳より

3

藤崎しげる



觀○光 ART EXPO 2013 (京都)

ゆうゆうとよぐ几帳面な風

そして、ものを作るということは自分の中に育っているイメージを正確にシミュレーションし、再現するということだと思います。

大隅さんと私は実はご近所だった時期があります。

同じ鎌倉市ですが江ノ島にごく近く大隅さんは腰越、私は七里ヶ浜という位置関係でした。実家にあるアトリエまで毎日自転車で走ってもほんの10分足らずの距離でしたが、その途中に大隅さんの家とアトリエがありました。

大隅さんのアトリエへ行くと、その整然と整理されている美しさにまず驚きました。きれいに工具類は仕分けされているのももちろん、旋盤の下に切り子のかけらも見えません。風で揺れる仕掛けを作るのにペアリングを使うと思うのですが、ペアリングを装着するための加工というのは100分の1ミリ単位の精度を要求されるということを機械屋さんへ行つた時に聞かされた覚えがあります。そういう加工を大隅さんがすべて自分の手で処理をしているのだろうということは容易に想像ができます。

でも大隅さんはそういう技術的なことを前面に押し出して話をすることもなかつたし、聞いたこともありません。

おそらく大隅さんにとって、そうした技術的なことは自分の作品をイメージの中から、現実のものへと引き出すための、單なる方法として技術的な事柄を考えているのだと思います。

そして、几帳面さというのは、自分の中にあるイメージがどうくらい具体的なものなのか、というひとつの尺度のような気もします。

再現する時に、どれぐらい具体的にイメージが作られて、検証されているかによって、イメージをたどる道案内の正確さも変わってくるでしょう。

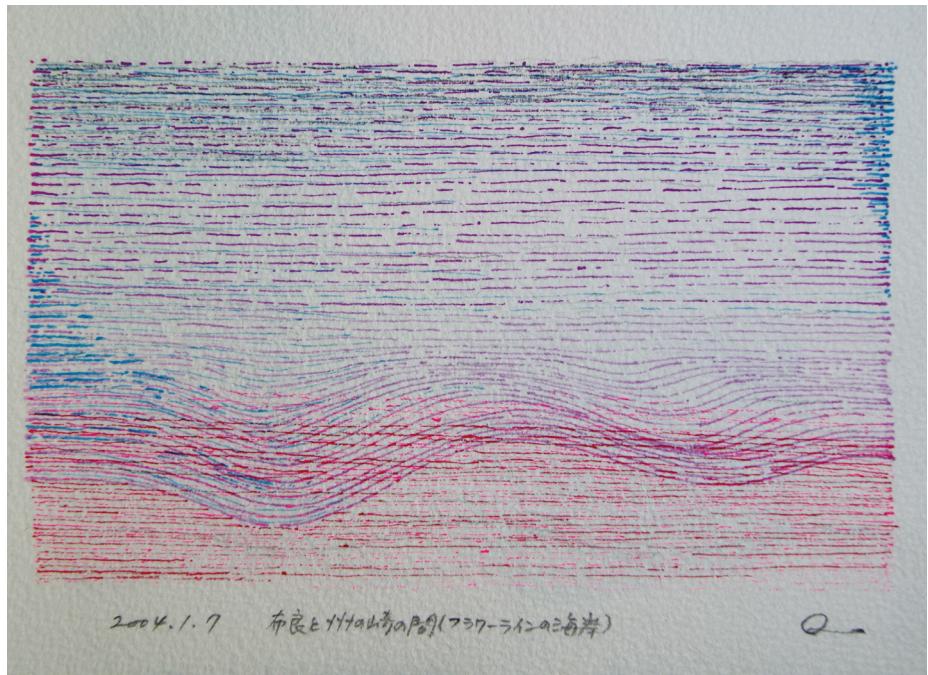
大ざっぱなイメージなら現実されるものもそれなりの精度しか持てないと思います。もっとも、精度と具体さがどんなに精密なものでも、イメージそのものの自在で自由な発想、例えば設計図というものは端的にそれを現しているのではないでしようか。

設計図には線と数値が書き込まれているばかりですが、いい図面というのはイメージの裏付けがなければつくれないはずです。何をつくるかというイメージです。そういう意味ではいい図面は絵画になつていています。

ものをつくるにあたつてイメージは不可欠なものです。そのイメージに欠落があつたり、具体的な配慮が細部にまで行き渡つていなければ実際の制作について、さまざまな補完が必要になつてきます。

でも昔くできたもので、その補完が不完全だらうがたいていの場合、イメージの不足分を埋め合わせるイメージがまたわいてでて、むしろ不完全なイメージをある意味オリジナルなものへと誘導する働きを私たちは持つていているのだろうと思うのです。

そうした補完機能が働いたとしても、補完機能があるから面白いにもかかわらず、最初のイメージがより精度の高いものになつていれば、かなりの部分でおのずと具体的な手順となつて見えて



ドローイング・布良と洲の崎の間（フラワーラインの海岸

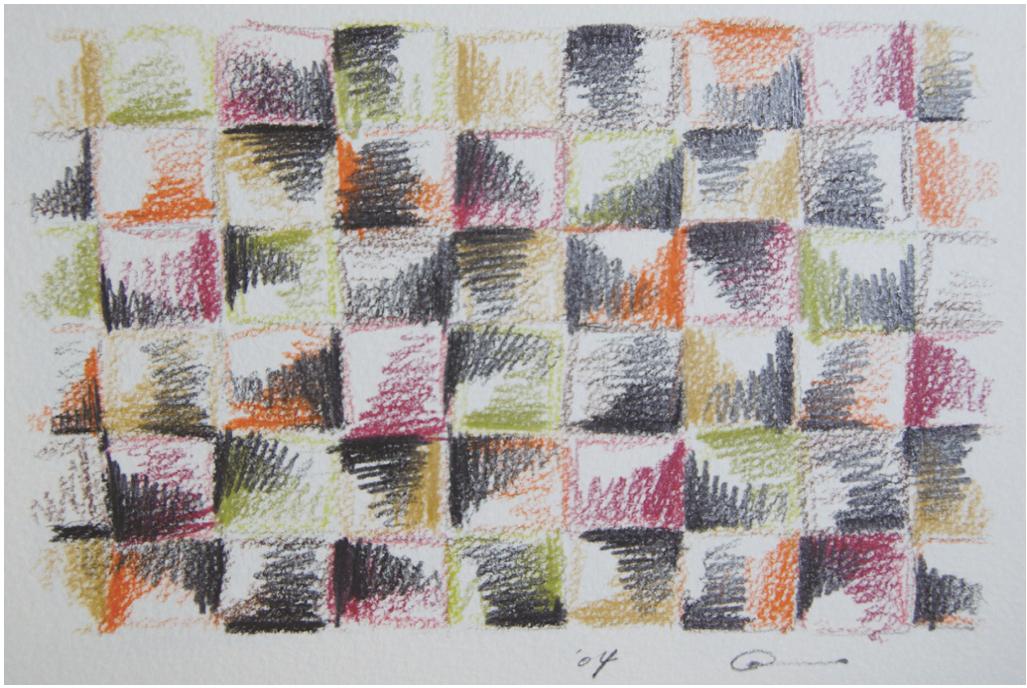
を切り取る事の楽しさを共感したことのように、彼の腹の底から沸いてくる声の響きを心地よく感じながら、真摯な態度をひそかにあこがれるというのが、多くの人にとつても多分、そうであるように、私にとつても中川絵画の鑑賞方法です。

何もわかつていなくて、ふりをしてバカ、いや、ただかぎ混ぜるだけの見苦しい風景を見たくない人にまで押し付けるようなことをしてしまったか、とひどく落ち込みましたが、この文章を書いたことで中川さんとかなり踏み込んだ話もでき、考えることもできました。そして何度も考えました。だからいいというわけではないけれど、私の中には、「イメージ」ということが大きく覆いかぶさり続けて、それを透かしてすべてのことを観たり感じたりするようになっていました。世界がイメージだけではなく事実を見るための事実には多様な視点があるという、あたりまえすぎることをいやというほど痛感しました。

いつだって、人は新しい写実を考えているはず。

繰り返すと、それは習慣化のワナに落ちてしまうけれどそれでも私も何度も同じことを繰り返すだろう。

(菅沼緑)



ドローイング・無題

いつだつたか、テレビで「ボアンカレの予測」というドキュメンタリーを見ましたが、これまで世界中の誰もその予測を証明した人がありませんでしたが、ロシアの天才数学者が、社会と隔絶して社会人としての生活をすべて投げ打ち、ある日とつぜん学界に論文が送り付けられ、そこに証明がされていたというものでしたが、それを可能にしたのは、ロシアの数学者がもともとは理論物理学から数学の世界へ入り込んだことから、物理的なイメージを数学の中にとり入れることができたからだらうと、結んでいました。

イメージがどのように抜けられるかということではないかと思いました。

こういう話を聞くと、新しいイメージや誰も見たことのない世界を開拓するなどが、もっぱら芸術の生きる道でしかあり得ないような気になってしまふのが、若い頃からの癖でしたが、いやいや、そんなことはないのだよという、年寄りの気持ちが最近になつてようやくわかり始めたのが最近です。

中川さんの展開する絵画が先進的なのか、ということではなく、やはり、中川さんの日常が「隙間」からにじみ、そこから感じられる構造に共感できるか、そういうふうに書いてしまうとそれまでで、話が終わってしまうような気が昔はしたものですが、そんなに簡単なことではない、人々が大昔から繰り返してきた、イメージという想像を研ぎ澄ますことも、あるイメージになじむ事もすら、差はないんだという事がようやく少し見えてきたように思います。

そういう意味で、中川さんの「隙間」と「透間」のなりたちに振り返ると、イメージの自由性や新しさでこれを見る事のばからしさが自分に返つてくるようにも感じます。

中川さんが若い頃に、体験したのこぎりと湿った木の感触や、木





観○光 ART EXPO 2013 (京都)

くるのではないでしようか。

それが几帳面さを支える執着への、あるいはイメージへの執着への、当然の結果だというようにものに支えられるイメージの正確さにはかならないのです。

大隅さんの几帳面さもまた例外ではないと私は思います。

そしてその几帳面で端正なイメージがゆらゆらと予測もコントロールもできない風の流れに左右されながら、見せる大隅さんの作品の動きの中にはそうしたイメージのコントロールというようなものは感じられなく、風の動きが非常にナイーブで、むしろそれが大隅さん自身のイメージとてもびつたりと重なって感じられるようになります。

晴れて青く澄み渡った屋外で木々の揺れる葉のきらめきと、チタンの虹の色が気まぐれな動きで、そよぐ姿を思い出して気持ちまで晴れてくる感じです。

(菅沼緑)

な存在なのではないだろうかといつも思うのです。

そして、イメージそのものは人から人へ伝わる時に、何も変化をしないのに、その陰にもうひとつ想像力ともいえべき、イメージがあつてそれが受け取る人によってそれの受け取り方として、固定化されているのか、はたまた自由な浮遊状態なのかとう、その受け手の状態によつても想像の拡がり方は全く異なつてしまふ不思議さをもたらす、イメージと想像の世界だと思います。

中川さんが実際に考えるイメージではなく、構造というものがどういう像を結んでいるかは、今の私にはわかりませんが、おそらく私のイメージ像とめちゃくちゃにかけ離れていることはないようを感じています。そう感じられることが、イメージというものの不思議な面白さでもあると思います。

もう少し中川さんに寄つて考えてみれば、扇状の色がくるりと1回転して丸になるとか変化はするものの、半透明な色の重なりで上へ下への色の変化が、チューリップとは違う、中川さんの想像世界の花畠なのだろうと思います。

既成の想像世界ではなく、自分でつくりあげる想像世界が、記号的になるか、アンフォルメルになるか、はたまた幾何学的な世界なのか、全くあり得ないシユールアリズムなのか、先入ちはさまざま試行錯誤を繰り返し、想像の世界の規定をいかに取り扱い、自由か不自由をまるで世界のすべての成り立ちをひっくり返すほどの勢いで、検討を繰り返してきましたが、結局は「イメージは不思議だ」ということ以外わからず、この私などは狭苦しいイメージ世界に閉じこもり悪あがきを余儀なくしています。



Q-11-12-A (それぞれの細部が全体を凌駕し始める時)



Q-13-9-B (まづめとまづめ)

こへ、イメージに向かつて強引に話をもつていきたがるばかりで能がないのかもしれません。

中川さんが絵を描こうと考えた時に、絵というものが、それを描く人と見る人の中にはいっぱい行き来するだろう、イメージがなるべく、純粹というか、なるべくそのままの形で、見る人に乗り移るようだ、という意味で純粹なイメージ（想像）を描こうと考えたのではないだろうかと思います。

それが「隙間」や「透間」であり、「偏在する…」だつたということで、花や風景の絵よりもなじみが深い題材だということなのだと思うのです。どのようになじみ深いことなのかなと考えると、あたるかはざれるかちょっとスリルが出てきます。

当初、中川さんはパレットナイフで色を弧を描くようにして、たくさん扇型に色を塗り重ねていました。そのたくさんの色が上の色を通して下の色が主張するような感じで「隙間」という構造が見えてきていたように思います。

チューリップの絵でも良かったのかもしれません、絵の題材として古くから描き尽くされて、自分が開催している子どもの絵画教室でだって、小さな子どもがまず描く絵がチューリップだったのを毎日のように眺めていたかもしれません。

そうして、イメージというものが空の状態に近く、それだけ純粹でもある子どもにすら、ある意味固定化されようとしているイメージというものが、人々それぞれにもたらされています。

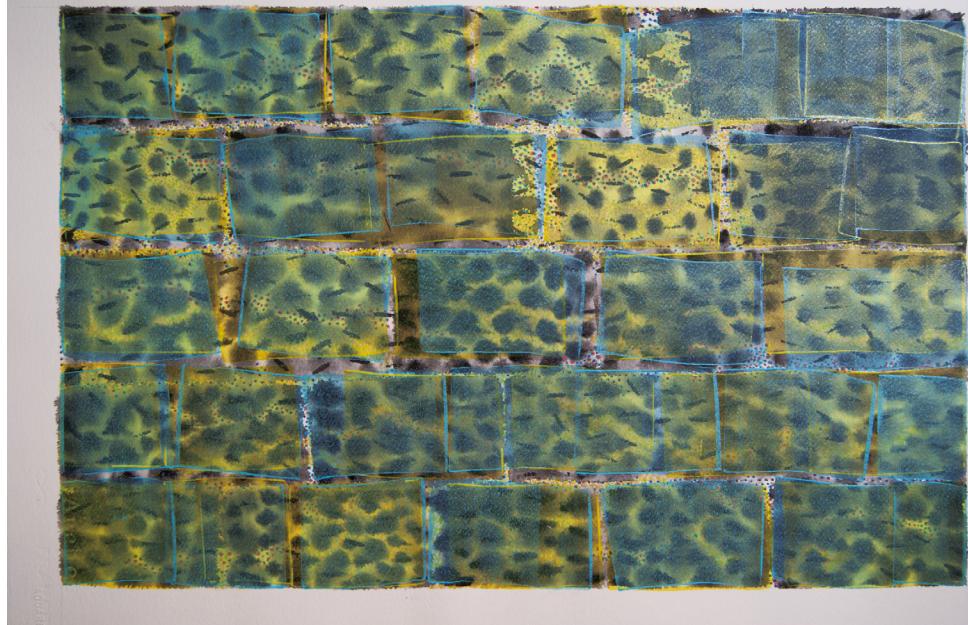
そういう中で、固定化されないイメージというものがあるのだろうか。イメージというものがイメージそれ自体で存在しうるのだろうか。たぶんイメージというものはなにかの媒体として存在して、なにかを伝えるための中間的な働きをするバクテリアや酵母のよう



観〇光 ART EXPO 2013 (京都)



観○光 ART EXPO 2013 (鎌倉)



q-08-z (隙間と透間)

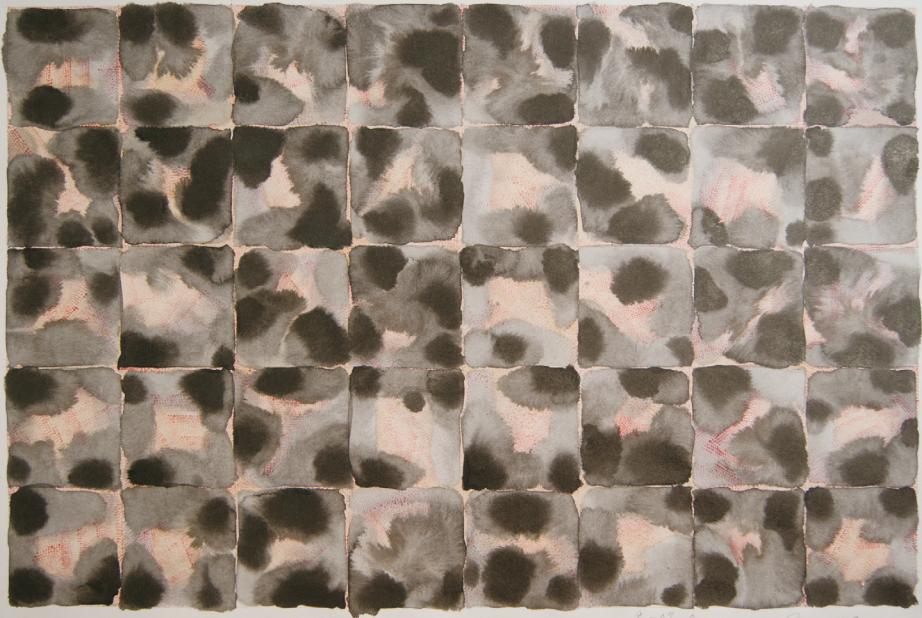
それは邪道かもしません。でも、イメージと呼ばれるものが、それだけでは成立しないあやふやなもので、しかもそれが人に伝わって、新たに人に宿り、想像として入り込み、咀嚼されて新たな想起の働きを、その新たな人の中で沸き起させるためには、ものごとが伝搬しなければならないと思うのです。

どのような言語や音楽、あるいは美術などが人々の間を想像の媒体として次々と移動して拡がっているのですが、その想起される何者かの媒体としての美術、というふうに限定をして、しかも絵画の想像の伝わり方を考えるとなると、漠然としていたものがさらに曖昧模糊とせざるを得ない情けなさですが、その漠然としたイメージの入り口に立つて、はるかに拡がる想像の世界こそ、わかるうがわかるまいが我々人間の持つている想像力のもう片方なのですから、おおいに満喫しなければもったいない。

ここは中川さんの「隙間」と「透間」とについて少しでも具体的な話を展開したいところですが、今私にできることはもつとずっと手前の入り口のところで、イメージや想像というものについて考えることができればと思うわけです。

もとをたどってゆけば、中川さんにとって、こうした命題が現れる前にはどのようにして、イメージという漠然とした想像をさせるものを具体化して絵画に変容させようかという問題があつたのではないかでしょうか。（どうもこの私の想像は全く的外れでした。後からの中川さんとの話で思ったのは、イメージの問題ではなく、物の置かれたあたり方に率直な感覚で把握することを感じえないままだということです）

物のありさまを中川さんの視線、隙間と透け間から眺める構造を写し取ることこそが写実のあり方だ、ということらしい。けれど、私は、認識がイメージによって動くという感覚が抜けきらず、何でもそ



q-07-o (遍在の強度)

きこりの体験や湿った木を切る、のこぎりで実際に木を切る体験をしたことで、木を切るということで、その方法を具体的にイメージしたあとでは、体感の、実感の深さがまるつきり変わってしまうはずです。筆を持って絵の具をキャンバスに塗りたくることはおなじでも、その行為を確認して実感した上ですることは全く別だということです。

ところが、その実感や体感ということが何をさすかが問題なのです。が、その実感を具体的に体感する方法が「絵画」ということなのではないでしょうか。

哲学や人類学といった人と自然を結びつけるものを解釈する、方法の知識はあくまで「知識」として読み手の中に入ってくるのでしが、その方法の知識がどのように咀嚼されて、「絵画」の実験に反映されてくるのかが、一番の問題です。

中川さんの場合、波間に揺れる小舟の上で一日眺める景色や魚との通信が素材やきっかけの発見となるだろうし、海の上で体感する出来事は、キャンバスの上の実験で実感に通じることになって「絵画」の体験は変質と変容を繰り返すことになります。

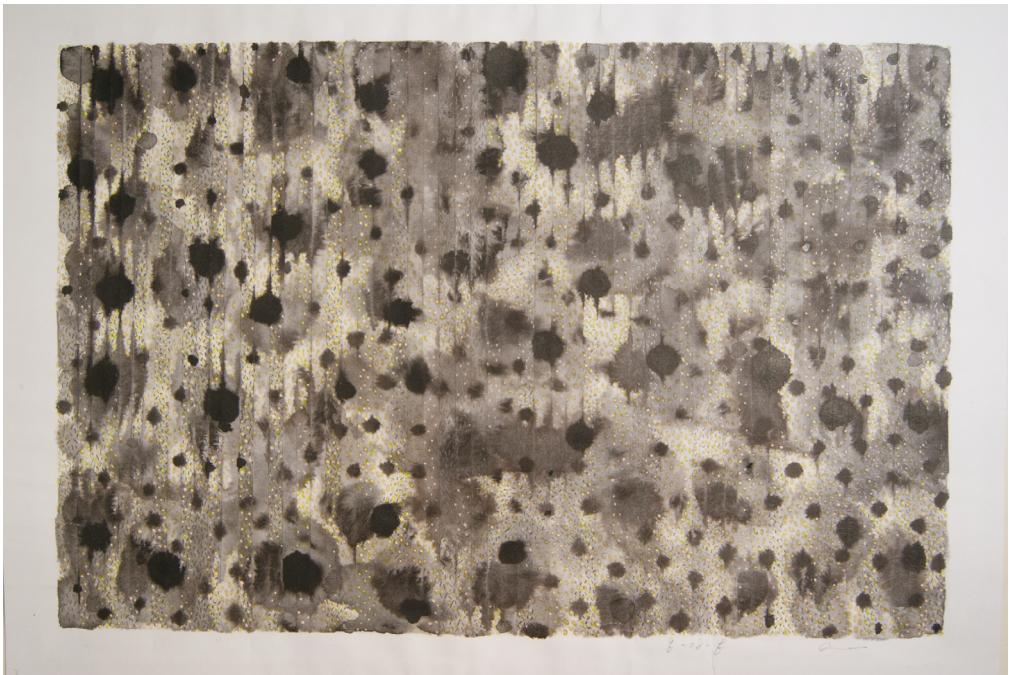
中川さんは「隙間」と「透間」とということを話しますし、透間は上の色を透かせて下の色が見える様子のことだろうし、隙間は色と色の間から向こうにある色が見えてくるというような、状況のことを言い表しているのだろうと思います。いや、そうではないかもしれない。いずれにしても私は、中川さんの言うことをきちんと把握できていなければなりませんが、絵画の構造をイメージの部分とそのイメージを含めるための、絵画と呼ばれる部分に分けて考えることができるのかな、とこれを書き始めて思いが至ったのです。



觀○光 ART EXPO 2013 (鎌倉)



観○光 ART EXPO 2013 (鎌倉)



q-08-b (隙間から)

ためには、のこぎりの刃の形状も特殊な形をしていることを知り、そののこぎりを手にしながら、私たちに話してくれた様子がとても嬉しそうだったことを今でも新鮮に覚えています。

それまで未知だったこと、体験を通じて知識とともに、体の感触でも覚えたことがどれだけ自分の血肉になつたことか。知ることと、体感して蓄えることは若かつた我々にとつても、その頃はいくらでも機会はあつただろうし、その機会を積極的に取り込む力はもっとたくさん私たちにも備わっていたはずです。

ことに中川さんはそうして得た体験や知識について、話すことがまるで確認をすることと同じだというように、知る喜びを再確認していたと思います。

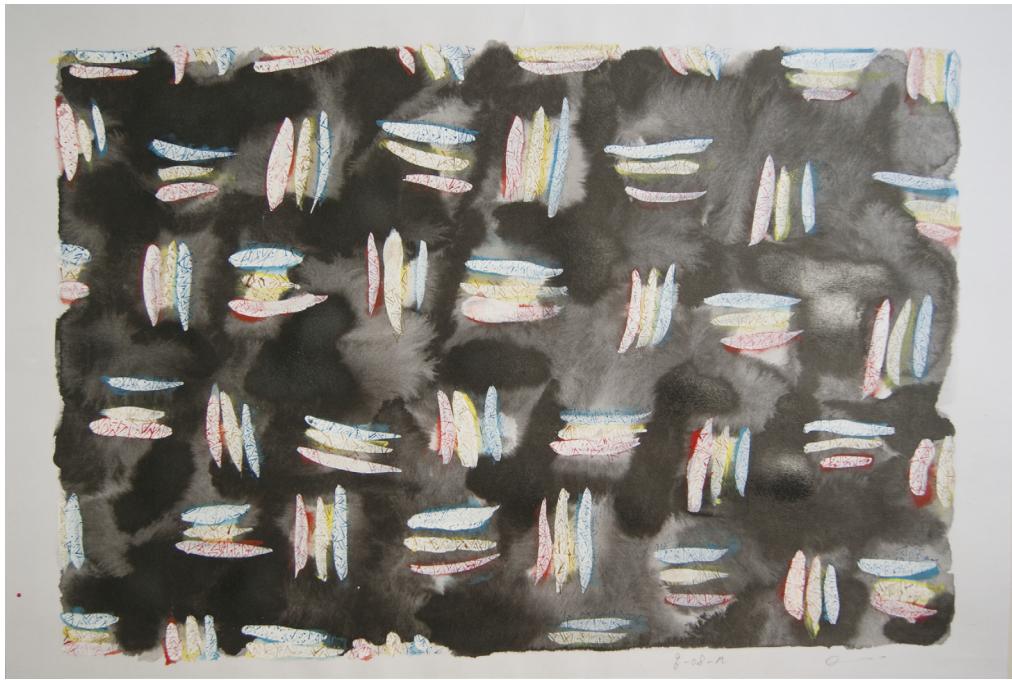
やがて、その頃の若者たちは新しい絵画の問題など、自分たちが取り組んでいる「美術についての「新しい具体」的な想像の方法について、哲学的な手法を探るようになつていったのです。

その中には、中川さんもおそらく読みあさつたのだろうと思ひます。書籍から得る、知識を得る、という行為を通して、ある意味体感したのだろう。その体感をみな、話すことで確認しあつていたのだと思います。

そうした体験を重ねそれをもとにしてシミュレーションも繰り返し、そして絵画をつくる構造のとらえ方を皆が工夫をしていました。

知識というのは不思議な媒体です。知る前とあとでは、おなじ体験でもがらりと解釈が違つてくるのですから。もっとも、単なる知識ではなく、ある意味、実感を伴つた、といい加えるべきかも知れません。

絵とはなんだろう。何のためにあるのだろうかと考えることも、



q-08-n (隙間から)

きっと、考える人間の中でさまざま間に形を変えて変幻自在に我々を悩ますのが「もの」ということなんだろうか。

中川さんは手紙の最後に、

「意識は心である」と脳の研究者の養老猛が言っています。

「内蔵は心である」と解剖学の三木成夫が言っています。

— 意識の心と内蔵の心がふたつ合わさって作品を良しと言わせます。

意識の整合と前意識（内蔵の記憶）の世界を振り起こす。
それが絵画の仕事。と思うのですが………

と結んでいます。

絵画とは何でしようか？ 中川さんの意見も彼が体験をした事実から掘り起こし、考えて見つけた「仮の答え」でしかないはずです。

言葉にするならば、仮の答えを検証しながら行動をすることが、制作だと思います。その仮の答えとそれに沿った確認作業に入ろうと、考えるだけでも、わくわくとするような喜びも感じるのかもしれません。（こそ小躍りをしたくなるような喜びも感じるのかもしれません。）（ここまで6月20日記入。以後5月記入の分につなぎます）

若い頃の中川さんも何にでもチャレンジしようとしていたと思いますが、ある時飛騨高山だったでしようか、山で木を切りそれを素材にして木彫に挑戦するというようなワークショップに参加をして帰ってきて、私たちにその時のことを興奮気味に話をしてくれたことを今でも覚えています。

初めて体験する、生木をのこぎりで切ることや、湿った木を切る



観○光 ART EXPO 2013 (鎌倉)

中川久

なかがわひさし

新しい写実

実はこれを書くのに中川さんとの話しゃ手紙でのやり取りを通じて、作品の成立に対しての考えがほとんど真正面から食い違つていたことを知りました。

私は、人が持つてゐる想像力こそが、すべての源だと考えて、イメージというものがどのように育つてきたのだろうかと、自分の想像力という枠に当てはめるようにして考えてきたのです。

だから当然のように中川さんの作品についても私は、イメージという想像力で体感したことを絵画や彫刻に当てはめようとしていたのです。

だけど、そのような「ものの見方」では自己の感覚的なイメージに当てはまるかどうかを判断することはできるかもしませんが、

「ものそのもの」を考えるには土台に色が付きすぎていることになると、思うよくなり始めました。

中川さんからの手紙の一部を引用させてもらいうと—
隙間と透間の関係を地と図（又は図と地）の関係とするならば、一色ずつ重ねる色彩は地と図の関係が逆転して画面の様相は一変します。あるひとつのイメージを構築するのではなく解体してゆくような感じです。画面のドンデン返し、その繰り返しは画面の密度をより細分化していくます。細部はますます際立つて来ます。

絵かきは見たがりやの実験者です。

画面の中の細部が緊張と活性を帯びるようつにさらに描き進めます。「細部の緊張と活性」の繰り返しによって画面全体が覆われると、画面に強度が生じ、画面は自立（自律）し始めます。

私は描き進めるべき方向と手順をもって制作に取り組みます。

繰り返すとある段階で、見るにたえられる強度の画面と個別の趣が生じます。そこで取りあえず心が良しと言います。ここで筆を置きしばらくの間壁に飾つておきます。ゆっくり眺めてさらに良しと思つたものを作品とします。

中川さんから最後にもらった手紙を読めば、実に明瞭です。

葛飾北斎は富嶽百景の後書きに、「己、齡三歳のころより、ものの形写す癖ありて、と書いていますが「絵」といわれるものが、もの形を写すところから始まって、より事実に近づこうとする、見ることへの欲望。それはすでにものの形に向かうのではなく、ものの方に向かつた。

と書き記したところで、それがどうした?と自らに尋ねれば、そ
うじゃないんだ、ものというのはそんなふうに一方通行ではなく、そ

q-08-z (遍在の強度)

